

## 学位論文内容の要旨

学位申請者	飯島(伊藤) 泉美【論文博士】 【比較文化学専攻 昭和63年度生】 (平成6年3月31日 単位修得退学)	要 旨
論文題目	横浜華僑社会の形成と発展-1859年から1920年代中頃まで	<p>横浜の中華街は、観光・美食のスポットとして広く知られているが、その形成・発展過程を長期的・多面的に明らかにしようとする研究は、従来ほとんど行われてこなかった。本論文は、横浜開港から関東大震災後の復興期に至る約60年間の横浜華僑社会について、(1) 形成・発展の歴史的経緯、(2) 組織団体、(3) 経済活動、の3側面から実証的に考察した研究である。</p> <p>第一部では、横浜開港(1859年)、日清修好条規締結(1871年)、日清戦争勃発(1894年)、改正条約実施(1899年)、関東大震災(1923年)を境として、この60年を5つの時期に区分し、それぞれの特徴を明らかにしつつ、横浜華僑社会の形成・発展過程を論じた。1859年から1871年までの「形成期」、1871年から1893年までの「成長期」、1894年から1899年の「変動期」、1900年から1923年震災までの「発展期」、震災後1920年代中頃に至る「再生期」という5つの時期を通じ、ホスト社会との関係は良好であり、開港から30年を経た1890年代中ごろから横浜生まれの2世が増え、「華僑」としての自己認識が形成されていった、とする。</p> <p>第二部では、中華会館、関帝廟、墓地、商業会議所、学校、同郷団体など、横浜華僑社会で重要な役割を果たした組織につき、検討した。これら是对内的には相互扶助・親睦・信仰保持など、また対外的には各種交渉や意思表示の主体となった。また、1920年代中頃以降には、中華民国のナショナリズム抬頭の影響を受けた新興団体が設立されたことを指摘し、その設立の経緯や活動内容を分析した。</p> <p>第三部では、<i>The Japan Directory</i>などの年鑑類を用いて、横浜華僑の職業構成を分析し、その経済活動が、従来認識されてきた貿易業や商業・金融業のみならず、製造業・建築関係業など様々な職業にわたっていたことを指摘した。また、事例研究として華僑によるピアノ製造の一企業を取り上げ、その経営のあり方を詳細に分析した。横浜華僑の役割として、言語や商習慣を異にする欧米人と日本人の間に立ち、貿易活動を仲立ちするとともに、欧米人の衣食住を支える職業を担ったことで、それらの新しい技術を日本に伝える役割を担ったことを明らかにした。</p>
審査委員	(主査) 教授 岸本 美緒	
	教授 小風 秀雅	
	教授 三浦 徹	
	教授 宮尾 正樹	
	教授 神田 由築	